

たのしく読ませる…

館報「津奈木」

新鮮なコマ切れ編集

— 青北郡津奈木村公民館報 —

広報紙はとかく楽しさに乏しいものが。本来は、楽しく読めるものであって欲しいもの。楽しく読んで貰うために編集者は苦労する。いくら素晴らしい着想やネタが豊富でも、それらを活かす技術が未熟では面白いものではない。だから写真一つ、カット一つ、活字一つにしても編集者は神経をとがらせる。

館報「津奈木」をよく注意して月号見ているが、編集者のそういった苦労と、配慮が、充分にうかがわれる。悪いけれどむしろ共感を覚え、楽しささえ感じるくらいである。

上手い活字の扱い方

タブロイド型の二頁だが、編集に無理がなく、活字の使い方が上手い。写真は割合に柄を大きく扱い、従って印刷効果もキレイである。内容的にも新鮮で、時折出される座談会の記事など、中見出しや文章の区切りなどに相対気がつかわれているため、楽しく読まされる。

華やかな編集者の横顔

編集者の山田功さんは、奇術と日本舞踊の師匠さん、アマチュア写真家、さらに小児科のドクトル、以上なかなか多彩な肩書の持主、広報紙の編集にかけては、

昭和二十五年の創刊以来だから一応年期が入っているわけ。山田さんのモットーは「各階層に期待されるスペースをつくりたい」ということ。

執筆陣も豊かに

「津奈木」は部落の区長さんを経由して全戸に配布されている。毎月発行。毎月第一面に「館説」という欄が設けられているが、いはば日刊紙の社説みたいな主張欄である。この執筆陣は、婦人会長、各小学校長、公民館運営委員のメンバーが持廻りで担当しているということ。

三人前の取材

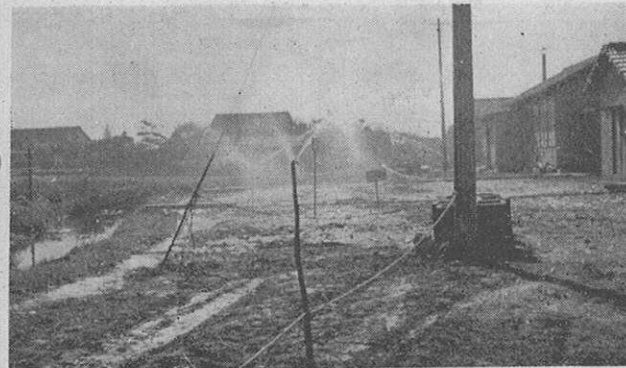
内容には絶えずニュース性と、読物的楽しさを忘れぬ工夫がはらわれている。ユーモアのある小さな囲み欄など、いつも好評を得ているという。編集締め切りギリギリまで取材活動が行われ、写真取材も



— 写真上は山田さん —

(広報課)

絶えず山田さん自身が立廻って奔走しているということ。そういうデスクプランに終らぬ、編集者のマメな足さばきと、フレッシュな編集が、館報「津奈木」を楽しく読ませる唯一の支えになっているともいえる。



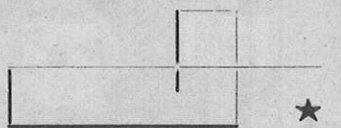
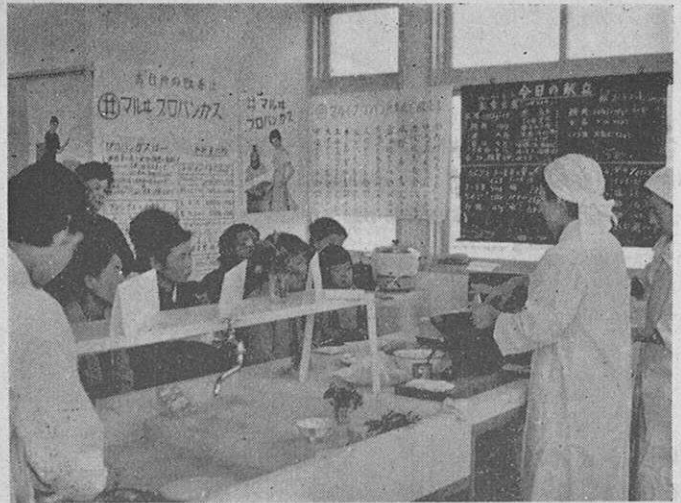
七色の虹を描いて畑地かんがい用スクリンプラーの実演。



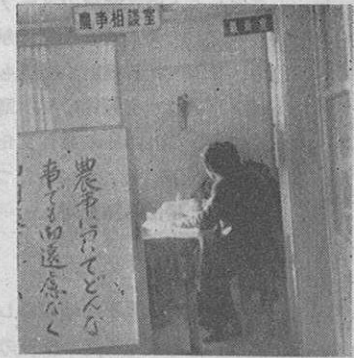
果産茶のかずかず、茶栽培のわかりやすい指導のための展示場……

★

中段左・おいしくて、栄養本位の農村生活向料理の実演…
下段右・オレンジ色のみかんでバツと明るい特産物の会場。



下・ひつきりなしに利用者の多かつた農事相談室



下・ここではしいたけの品種から栽培の仕方まで一目でわかる

